

美術科総論

テーマ 「言語活動で育むコミュニケーション力」

1. テーマの設定の理由

多くの生徒は、画家・芸術家になるために美術の授業を受けている訳ではない。

美術教育は、美しいものを美しいと感じ取れるちから、あるいは美しさを表現するちからを付けるのがベースだが、その技能を通して得ることのできる能力は、コミュニケーションの能力だと考える。

コミュニケーション能力は、義務教育を終えて社会で生活していく「生きる力」としての人間形成に最も重要な要素のひとつであるからだ。

美術は多くの場合、創造者で有る作家（本人）だけでは成り立たない。

鑑賞者である他人がいてこそ、作品に対する評価が生まれ、わかり合い、認め合い、美しさの共有ができる。

2. 本年度の研究について

本校美術科では作品制作または鑑賞を通して得ることのできる、人と人との有機的なコミュニケーション能力の高まりを核に考えている。

授業では、班活動による制作の助け合いやクラスで行うプレゼンテーション、鑑賞活動を通して独りから班へ、またクラス全体、掲示や文化祭などの全体鑑賞を通じての学年全体や全校生徒へと、コミュニケーションを段階的に繋いで広げる活動を行っている。

箇条書きにすると、次の通りである。いずれも各題材において共通。

- ・導入後のアイデアスケッチ時（感受・表現）

題材やテーマから、自分のイメージを沸かせ、それを他者が理解できる形でワークシート（エスキース）に残す

- ・制作途中の都度都度（理解・伝達）

実習を通して生まれたアイデアや工夫を、グループ内で伝え合い、共通のものとする

- ・完成した作品のプレゼンテーション（解釈・説明）

自分の作品の、がんばった点、工夫した点、上手く行った点を、プレゼンテーションという形でアピールする

- ・完成した作品の相互鑑賞（評価・論述）

作品鑑賞を通して、第三者に自らの価値観を伝える

作品鑑賞を通して、第三者の意見を理解し、新たな価値観と向き合い、認め合う

本年度はその延長として、また中学校の美術科教育の集大成として、学校を出た環境「地域」との繋がりを持つ機会を作ることにした。

学校内で留まるのではなく、保護者や地域の方々の目に触れる、あるいはコミュニケーションの取れる形での作品製作および展示を行うことで、より発展的な効果を期待できるものとする。

3. 成果と課題

一つの題材に限らず、全ての題材に逐次言語活動、グループワーク等を導入することにより、プレゼンテーションの質や、ワークシートの記入の質は向上している。

初めは表面的で説明のない誰でも書ける文章のワークシートが多かった。

「詳しく伝えたい事を書かないと伝わらない。面白かった、ではなく何がどう面白かったのか」

「表面的なことじゃなく、自分がどう思ったかを書かないと意味がない。自分で思った意見は恥ずかし

くない。それより恥ずかしがってそれを隠して一般的な感想文を思い出して書く方がよっぽど恥ずかしい」

等など、指導を重ねていくうちに、自分の思ったことを、より詳しく文章にできるように変化していった。

また、今回の「実践1」で紹介する学校外での活動では、地域の方々含む沢山の人に学校の活動や生徒の作品を見て頂く機会ができ、生徒との直接のコミュニケーションではありませんが、学校の活動や生徒を知っていただく良い機会になった。

和歌山県立近代美術館で行われている県展と時期が重なったおかげで、一般の文化的活動に造詣が深い方々も多数生徒作品を観て頂いた。また近隣住民の方や、近隣幼稚園、小学校の園児・児童のみなさんにも、制作風景や作品を見て頂き、実際に作品に触れ、楽しんでくれた人もいた。

ワークシートなどの文章記入やプレゼンテーションは、比較的評価がしやすいところではあるが、コミュニケーション力という大きなくくりとなると評価のバロメーターがなく、具体的にコミュニケーション能力が、どれだけ高まったのかということが、ニュアンスでしか測れない部分に難しさがある。

今後、このコミュニケーション力を、誰にでもわかる形で表現する方法を見つけ出したいと考えている。それが今後の課題である。

- ① 題 材 目に見えないけれど確かにそこに存在するモノ
- ② 題材について

和歌山大学教育学部附属中学校に隣接する和歌山県立近代美術館の敷地内にある「奥山公園」に、ビニールロープを張りめぐらせ、インスタレーションを行う。

インスタレーションとは、絵画でも彫刻でもない、設置した「モノ」と、その空間全体を含めて一つの作品とする空間芸術のことを言う。一定の展示期間を過ぎると、解体され消滅してしまう。だからこそ、一緒に制作した者しか体感できない一体感を持った達成感を得る芸術の形。

3年生全クラス（4クラス）で、午前中（1限から4限）かけて、制作する。

ビニールロープ（緑、赤、黄、青の4色）を、奥山公園の木々にピンと張り巡らせる。

張り巡らせたビニールロープに、各自家から持ち寄った、自分の風鈴や鈴など、風で様子が変わったり音が鳴るものを吊るす。自分で持ってきた風鈴等を作品に設置することにより、自分の作品という実感がより湧く。

また風鈴を設置することで、目に見えない風を、目に見える形に変換し、普段気にしない風というものを意識してみようという、インスタレーションである。

普段意識しないと通り過ぎてしまう、外の空気や風などを感じる体験をする。

また、ゆっくりと作品を鑑賞し、『目に見えない』という対象と向き合うことで、それ以外の『目に見えない』モノを意識してみる。

たとえば自分の気持ち（自分との対話）や、人の『気持ち』、また人と人との『会話（コミュニケーション）』など、普段私たちの生活でなくてはならない、けれど『目に見えない』モノ達のことを。

それらを再認識したとき、掛け替えのない自分や、自分の家族、自分の友達、周りの大人、そして自分達が暮らすこの地域を、「身近で大切なもの」という感情を味わう体験ができれば、最高だと考えている。

本時は、制作が終わり翌日、自分達が完成させた作品を鑑賞する单元である。

普段意識しないと通り過ぎてしまう、外の空気や風などを感じる体験をする。

そして、『目に見えない』という対象と向き合うことで、それ以外の『目に見えない』モノを意識してみる。

たとえば自分の気持ち（自分との対話）や、人の『気持ち』、また人と人との『会話（コミュニケーション）』など、普段私たちの生活でなくてはならない、けれど『目に見えない』モノ達のことを。

それらを再認識したとき、掛け替えのない自分や、自分の家族、自分の友達、周りの大人、そして自分達が暮らすこの地域を、「身近で大切なもの」という感情を味わう体験ができれば、最高だと考える。

③ 学習目標と評価基準

学習の目標	<ul style="list-style-type: none"> 『目に見えないけれど確かにそこに存在するモノ』例えば空気や風を感じる体験を通して、目に見えない『気持ち（自分との対話）』や『会話（コミュニケーション）』の再認識や掛け替えのないものという認識を深める。 目に見えないものを見える形にするには、どうすれば良いかという工夫を通して、豊かに発想し構想する能力や自分の表現方法を創造的に表現する能力を伸ばす。
評価基準	
美術への 関心・意欲・態度	<ul style="list-style-type: none"> インスタレーションに興味を持ち、意欲的に制作に取り組むことができる。 インスタレーションに興味を持ち、意欲的に鑑賞に取り組むことができる。
発想や構想の能力	<ul style="list-style-type: none"> 「風鈴や鈴、またはモビールなど」を、設置するに相応しい場所を決めることができる。
想像的な技能	<ul style="list-style-type: none"> ビニールロープを弛まず張れるように工夫することができる。
鑑賞の能力	<ul style="list-style-type: none"> 『気持ち（自分との対話）』や『会話（コミュニケーション）』の再認識や掛け替えのないものという認識を深めることができる。

④ 学習計画（単元構成表）

学習過程	学習の中心	観点
1～4時 制作活動	奥山公園という場所を知り、感じる。 目に見えない「風」を、目に見える形「奥山公園にロープに張り巡らせ、風鈴（など）を吊って、風が吹けば音や揺れによって見える形」にする。 作品を美術館側から眺め、記念写真を撮る。	【関】 【発】 【技】
5時（本時） 鑑賞活動	作品の鑑賞を通して、目に見えないけれども大切な物を考える。	【関】 【鑑】

（道徳的視点）

2 - (2) 温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し思いやりの心をもつ。

⑤ 本時の目標

『気持ち（自分との対話）』や『会話（コミュニケーション）』の再認識や掛け替えのないものという認識を深めることができる。



⑥ 本時の展開

	学習活動	教師の支援等
導 入	あいさつ 前時のおさらい 鑑賞活動	・ 前時の作品製作を振り返る。 ・ 自分の風鈴（など）の真下に寝そべり、上を見上げて話を止め、ゆっくりと風鈴（など）、テープ、周りの環境を、じっくり鑑賞する。（飾り付ける前と、後とはどう違うか。見た目だけではなく気持ちの面でも。受ける印象から） （音や動きで、風を見ることができているか、風の通り道を探そう）
	ワークシート 感じたことの共有	・ 感じたことを、ワークシートに書く。 ・ 何名か指名し、どんな点に気づいたのかをピックアップし、共有する。
展 開	問いかけ ワークシート	前回の制作では目に見えない「風」を、見える形にした。 今回は、この作品を鑑賞しながら、他にも目に見えないけど確かにそこにあるものを考えてみよう。 1) 先ずは一人で、ワークシートに書き出す。 2) グループで集まって、どんな話が出たのか話し合う 3) 全体での発表をする （風、妖精、空気、臭い→会話、気持ち、コミュニケーション→思いやり、友情、愛、上下関係…へと話をつなげていき、目に見えないけれど確かに存在する、大切なものに気づかせる）
	まとめ ワークシート あいさつ	今回のインスタレーションの制作を通して、目に見えないけれども、確かに存在する、大切なものの存在を再確認し、分かち合う。 ワークシートを書く。

準備物

生徒…美術ファイル、筆記用具

授業者…鑑賞ワークシート

⑦ 結果と考察

このインスタレーションの計画は、1カ月前から授業の中で生徒と共に考えた。

初めは生徒達も、聞きなれない「インスタレーション」という言葉や、近いけれどあまり足を運んだことのない「奥山公園」に何を設置すれば良いのかなど、イメージ出来なかったが、日にちが近付くにつれ実感が湧いてきたのか、廊下ですれ違う3年生が声をかけてくれた。

「先生！インスタレーションの計画はどこまで進みましたか？」「インスタレーションの私の案は通りましたか？」「当日がとても楽しみです」

制作日、鑑賞日共に、雨さえ降らなかったが、とても風が強く寒い日だった。おかげで、体調を悪くし保健室に行く生徒や、風で舞い上がった砂で目が痛くなり保健室に行く生徒も数名見られた。

そんな状況でも、生徒達は自ら率先して、ロープの張り方で工夫した点や発見した点など、わくわくした口調で教員にアピールしてくれた。

最近の子供は外で遊ぶ経験が少ない。昔よりも物騒になったという世論と、ゲーム機器や通信機器の発達などが原因だろう。だから、改めて外に出て走り回る活動は、よほど楽しかったのだろう。

一連の活動が終わり、ひとつ失敗はインスタレーションの活動を制服で行わせた点である。制服ではせっかくの校外活動の幅が制限されてしまう。体操服で行うべきだった。

インスタレーションの制作後、自分達が制作した作品をじっくりと味わい、深く感じる時間が不足していた。授業時間数が少ないこともあるが、せっかく公共スペースに大掛かりなアートプロジェクトを施したのに、その空間を走り回ったり、音や風、自然を感じたり、じっくりと「遊び」に興じる時間を設けるべきだったかもしれない。

また、生徒にカメラを持たせ、自分達で完成させた作品を、ファインダーを通して空間トリミングさせ、派生的に自分の目線から観たインスタレーションをポートフォリオ化させるという可能性もある。

他学年での鑑賞では時間をゆっくり取り、3年生のインスタレーション作品の中で自由に先輩の作品を鑑賞した。駆け回ったり、ビニルテープを揺らしてみたり、寝転がってみたりと、それぞれが空間を感じていた。

インスタレーション作品の中で生徒が走り回っている姿こそ、この作品の完成形なのではないかと思えた。

また昨今の現代美術の流れとして「参加型のアート作品」が増えつつある。参加型アートとは、観客もアーティストと一緒に作品制作を行ったり、観客が作品に触れることによって初めて完成するとされている形の作品のことである。

日本国内の近代美術館においても例外ではなく、観るだけの美術館から、参加する美術館へと変貌を遂げようとする最中にある。

それらの参加型アート作品は、参加しない者にとっては、作品の醍醐味を味わえないという側面を持っている。多くの一般人は、参加の方法が分からず、「美術館は作品に触れてはいけない。遠くから作品を眺め鑑賞するもの」という固定観念が根強いので、遠くから鑑賞するだけで、作家の意図を汲めずに美術館を後にするケースが多い。

義務教育の範囲内で公共空間を使ったアートや参加型作品、また協同作品制作を経験することは、それらの固定観念を体験を通して払拭するものであり、インスタレーションに限らず、体験的に触れる機会を作ることが、これからの中学校美術教育においては必須のことなのではないかと考える。



感想文



私は、この授業をうけて、なにもかも初めての
アートだったのでも、とても楽しかったです。
ひもを木にまけつけておくことは、とても大変でいそがしかった
けど、みんなと協力することができてよかったです。
この作品が、たくさんの人たちの心にくるようなことに
役にたつことができればいいと思います。
作品は、こんなに心がなごむなんて、びっくりです。



目に見えない物を、目に見える物に表すなんて難しいんじゃないかと
思ったし、自然な風景の中に人工物のビルやモビルなどを
飾るなんて悪目立ちするんじゃないかと思っていたけど、どれも
目には見えていないけど確かに存在しているものを引き立てるもの
だったし、こうやって目に見えるものとして表すことにより、普段
見えないから、とあまり気にかけてたこともなかったものの良さを
改めて感じ取ることができました。



今回のインスタレーションで「最初は何のためにするのかなと
思ってたけど」「目に見えないけれども確かにそこに存在するもの」とい
うのを風だけじゃなく人にもいっはいあるんだななと思いました。
目には見えないけどそれがなくなったら生きられないくらい大事な
ものもいっはいあるななと思いました。
これから、気持ちとか目に見えないものも改めてもっと大事に
していこうと思いました。



やはりはじめは面倒臭いなと思っていたけど、やり始めると楽しくて、
またやりたいたいと思うようになった。「皆と協力して作りあげた作品ではない」と
思っていたけど、完成した作品をみると、「皆頑張った」という作品になり
ました。この作品は学年全員が協力しなければできなかったし、雨が降ったり
風が強かったりして天候が悪くなってきたこのインスタレーションは、生涯で覚え
たいと思います。同じメンバーで全く同じものを作るのは無理だから、今回のインス
タレーションには意味があったし、良い思い出になりました。「目に見えないけれども確かに
そこに存在するもの」をもっと感じることができるようになりたいなと思います。



今日は、昨日の インスタレーションを通して、みんなのココロが"もっと近づけた"感じがします。途中 雨に打たれながらも、悲しそうな空をみたり、モビールゼンマイや鈴などが"ふわふわ"とゆられていて、この場所には、小さい頃によくあそびに来ているので、違う風景に見えました。

それに、カラフルなビニールを見てみると、"63期生で良かった。"このメンバーで"楽しかった"、"ビニールが切れて少し苦勞したけど、できて良かった。"と思うことができました。この作品を通してたくさんのキモチの意味を改めて知りました。63期生最高!!



感想

すごく楽しかったです。

モビールを張りめぐらせているときはただ"楽しい"とかそういう思いで"いなかたけど"、完成してみても、ねころびて目をつぶると、みたり周りの物を静かにながめたり、身を澄ますと、上にも書いてあるような風だしたり、音だしたり感じました。また、鳥の鳴き声を聞いてその1羽の鳥の生命を感じたり、この学年全員が同じ場でねころびている"目に見えないけれど"確かにそこに存在するモノ"を感じてみたんだな、と思うと"なんだか、良い意味でぞ"として、ちょっと鳥肌が立ちました。この授業は美術だ"けれど" "心で感じる美術的なモノ"を少し学べたような気がします。
←今まで習ってきたとは違う



私は今回のインスタレーションが"本当にあって良かったなって"思います。はじめはインスタレーションとか"予想もできていなかたけれど"今は、3年生のみんなと"大きな1つの作品を作れてすごく楽しかったです。"そして、他の学年の人や地域の人にもたくさん見てもらいたいと思います。風が"テープ"がなびっていたり、音がしたりして、このテーマどおり"目に見えないけれども"確かにそこに存在するモノ"を感じることをできました。今回の貴重な体験がまた"胸中の思い出が増えて、良かったです。"